

歴史館まなび隊

4

片倉組（日本を代表する製糸会社）事務所の外観



1878年（明治11）、のちの片倉製糸紡績株式会社のもとになる垣外製糸場が、諏訪郡川岸村（現岡谷市）に、片倉兼太郎によってつくられました。兼太郎は松本などで工場の数を増やし1895年（明治28）には片倉組というグループに発展させました。

ここでは片倉組の事務所一階の外観を復原しています。この建物は、1910年（明治43）に建てられたものです。現在は、

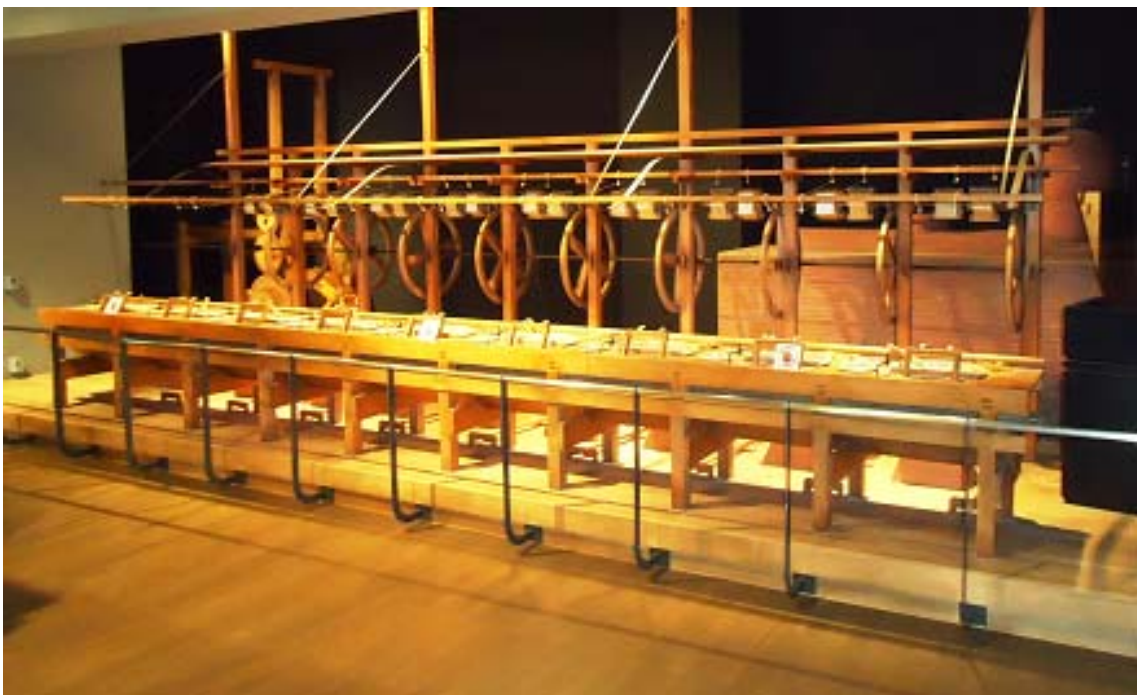
第二次世界大戦後の財閥解体後に片倉工業株式会社の印刷部を継承した、中央印刷株式会社（岡谷市川岸）の事務所として使われ、国の登録有形文化財になっています。

〈片倉組事務所の「煉瓦造」について〉

この建物は煉瓦造に見えますが、実は、外壁にこの頃流行していた煉瓦色のタイルを貼ったものです。これは強度も強く、雨や凍結にも強いものでした。冬、寒さの厳しい岡谷の風土にあります。

埴科郡西条村六工製糸場

ここは、1874年（明治7）、埴科郡西条村六工（現長野市松代町）にできた六工社という製糸工場の復原です。そのころの日本は、蚕種（卵）や生糸が重要な輸出品でした。明治政府は日本を豊かにするために蚕糸業に力を入れました。六工製糸場は、1872年（明治5）、群馬県につくられた官営富岡製糸場をモデルにしたフランス式製糸工場で、一度に50人が座って作業できることから「フランス式50人繰り」の製糸工場といわれました。



工場の蒸気釜は地元の松代焼の釜が使われています。考案者は松代藩士の海沼房太郎です。当時、地元にはボイラーはもちろん煮繭や繰糸の釜、蒸気をとおすパイプなどをつくる技術がなかったので、蒸気器械をつくり出すことにたいへん苦勞しました。繭を二つに切って釜の形を考えたり、針金を蒸気のとおる管に見立ててミニチュアのモデルをつくり、蒸気器械をつくりあげたといわれています。松代焼の釜は凍みに強く、使いやすい利点がありました。

糸繰り器の下を見てみましょう。ペダルがついていますね。何のためについているのでしょうか？ みんなで話し合ってみましょう。